新約聖書 ヨハネによる福音書 3 章 1 節―17 節（新共同訳）

[1]さて、ファリサイ派に属する、ニコデモという人がいた。ユダヤ人たちの
議員であった。[2]ある夜、イエスのもとに来て言った。「ラビ、わたしどもは、
あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におら
れるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行うことはできな
いからです。」[3]イエスは答えて言われた。「はっきり言っておく。人は、新
たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」[4]ニコデモは言った。
「年をとった者が、どうして生まれることができましょう。もう一度母親の胎
内に入って生まれることができるでしょうか。」[5]イエスはお答えになった。
「はっきり言っておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に
入ることはできない。[6]肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたもの
は霊である。[7]『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったこ
とに、驚いてはならない。[8]風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いて
も、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そ
のとおりである。」[9]するとニコデモは、「どうして、そんなことがありえま
しょうか」と言った。[10]イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教
師でありながら、こんなことが分からないのか。[11]はっきり言っておく。わた
したちは知っていることを語り、見たことを証ししているのに、あなたがたは
わたしたちの証しを受け入れない。[12]わたしが地上のことを話しても信じない
とすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう。[13]天から降
って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもいない。[14]そ
して、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。
[15]それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。
[16]神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じ
る者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。[17]神が御子を世に遣わ
されたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。

説教「永遠の命」

本日の福音書には、「ニコデモ」という人が登場します。ニコデモは「ファリサイ派に属する」「ユダヤ人たちの議員」でした。ユダヤの最高議会の議員である、非常に地位の高い人物です。イエスの起こす奇跡に心を打たれていたニコデモは、ある夜、イエスのもとを訪れました。

当時、ユダヤ社会の支配階級はイエスを敵対視していました。そこに属するニコデモが、個人的にイエスを訪問するのは、極めてリスクが高いことであったと思われます。自分の名誉を傷つけ、社会的地位を危うくするかもしれない行動だったと言えるでしょう。

そのようなことを敢えてしたニコデモには、彼なりのひたむきな求道心があったのだと思います。彼がどんなに高い社会的地位にあり、富に恵まれていたとしても、それでもなお満たされない何か、真理を求める気持ちを、心の内に秘めていたのではないでしょうか。

イエスの奇跡を通してニコデモは、イエスを「神のもとから来られた教師」であると感服していました。

しかしイエスは、そんなニコデモに、水を差すかのようなことを言いました。

「はっきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」（ヨハネ 3:3）。

この言葉には、「奇跡を見て信じただけではいけない」という意味が込められています。それはニコデモへの答えであると同時に、奇跡を見てイエスを信じた多くの人たち、奇跡ばかりを信奉する人々に対する答えでもあるのです。

自分自身が何も変わらないまま、奇跡だけを見ても、神の国を見たことにはならない。神の国を見るには、人は、新たに生まれなければならない。新しく生まれた者、新しくなった人間だけが、イエスの奇跡をしるしとして見ることができるのだ、というのです。

「新たに」（アノーセン）は、ギリシア語では「上から」「神から」という意味をもっています。したがって「新たに生まれる」とは、「上から生まれる」「神から生まれる」ということであり、霊的な再生のことを指しています。

ですがニコデモは、イエスの言葉を理解できませんでした。ニコデモは、「新たに生まれる」ということを、もう一度母親の胎内に入って生まれるように、地上の生を再び初めからやり直すという意味に取り違えます。

「はっきり言っておく」とは、原語のギリシア語では「アメーン、アメーン、レゴー、ソイ」と発音します。3 節にとどまらず 5 節でもイエスは、理解をしていないニコデモを根気よく諭すように、「アメーン、アメーン、レゴー、ソイ」と繰り返して、こう言いました。「だれでも、水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない」。

「水」とは洗礼の水を意味し、「霊」とは「上から」与えられる「新しい命」を意味します。

イエスは、さらに言葉を続けます。「肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である」。

「肉」というのは、やがて死んで滅びていく、単なる肉体の次元の存在である、ありのままの人間の在り方です。これに対して、霊とは、上から与えられる新しい命のことです。その肉と霊とが、ここでは、水と油のように交わることのない、対立的な人間の在り方として示されています。

「新たに生まれる」というイエスの言葉の真意をニコデモが理解できなかったのは、イエスの霊の言葉を、肉の言葉として受け止めたからだと言えるでしょう。ゆえに二人の対話は、全く噛み合わなかったのです。

イエスは、「霊から生まれた者」について、風にたとえて説明します。実際に「霊」（プネウマ）と「風」（プネウマ）とは、ギリシア語では同じ言葉です。

「風は思いのままに吹く」という言葉には、「霊から生まれたもの」の絶対的な軽やかさと自由な働きが表されています。それは、「肉から生まれたもの」の重たさ、不自由さとは、全く異なるものです。

生まれながらの私たち人間は、「肉から生まれたもの」です。しかし、生きながらにして一度死んで生まれ変わるように、生きながら「新たに生まれる」ことによって、「肉から生まれたもの」が「霊から生まれたもの」に変わることができるのです。

「天から降（くだ）って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもいない」（ヨハネ 3:13）という言葉に表されている「人の子」とは、イエスご自身のことです。

ここでは、キリストはまず天から降（くだ）った、人間と同じところに立った、ということが強調されています。人間と同じところに立ったイエスのみが、人間のために天と地をつなぐ者となったのです。

「そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければならない」（ヨハネ 3:14）。

「モーセが荒れ野で蛇を上げた」話は、民数記 21 章 4–9 節にあります。神のお告げによって、モーセが青銅で造った「炎の蛇」を旗竿に掲げ、それを仰いだ人々は命を得たのです。

蛇は人間を害するもの、罪や悪の象徴でもありました。しかし同時に、このモーセが造り旗竿に掲げた青銅の「炎の蛇」のように、癒しと救いのシンボルともなりました。この二面性が十字架の二面性とも通じるのでしょう。のろいと死の象徴であった十字架もまた、恵みと救いといのちの十字架となったのです。

本日の福音書では、ニコデモが「夜」にイエスのもとに訪れたことが記されています。

ニコデモが「夜」にイエスのもとに来たことについては、様々な解釈がなされています。ニコデモがイエスのもとを訪れたのは、なぜ夜だったのでしょうか。

本日の福音書に触れた私の心に、夜の暗闇に紛れて、イエスに会いに行ったニコデモの情景が浮かびました。その夜の暗闇は、ニコデモ自身の何か不足感のある心の状態を表しているようにも感じられます。夜の暗闇に紛れながら、心の内に、イエスと会うことへの希望の灯火をもって、ニコデモはイエスのもとに足を運んだのではないでしょうか。

叙情的、幻想的、神秘的な雰囲気が流れ、心に聖霊の風が吹き込んでくるような本日の福音書では、イエスとニコデモの話は噛み合わないながらも、そこにはイエスとニコデモの深い心の交流がなされていたことを感じます。ニコデモは、イエスから招かれていたのです。

「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない」（ヨハネ 3:14）。

「上げる」とは、キリストが十字架上に上げられることを意味しています。

イエスが十字架にかけられた時、その十字架は地に深く突き立てられ、この地上に深く根ざしました。

そして、イエス・キリストによって「恵みと救いといのちのシンボル」となった十字架は、教会に掲げられる十字架のように、地にはついていなく宙に浮いたような状態の天上的な十字架となりました。

心の重荷や、肉である自分の体の重たさや不調を感じて辛い時は、天上のキリストの十字架を心の内に思い浮かべ、仰ぎ見てください。

その天上のキリストの十字架は、あなたの心の重荷や、あなたの背負う十字架を軽くしてくれるでしょう。

「わたしが地上のことを話しても信じないとすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう」（ヨハネ 3:12）。

イエス・キリストは、天と地をつなぎ、私たちの罪を赦し、私たちに永遠の命を与えてくださるために、この地上で十字架にかかりました。

憐れみ深く、慈愛に満ちた主イエス・キリストの御名を通して祈りましょう。

＊＊＊ 説教ここまで ＊＊＊

以下、本日に関連する聖書箇所（第１朗読と第２朗読）です。

新約聖書 イザヤ書６章１節―８節（新共同訳）

[1] ウジヤ王が死んだ年のことである。わたしは、高く天にある御座に主が座
しておられるのを見た。衣の裾は神殿いっぱいに広がっていた。[2] 上の方には
セラフィムがいて、それぞれ六つの翼を持ち、二つをもって顔を覆い、二つを
もって足を覆い、二つをもって飛び交っていた。[3] 彼らは互いに呼び交わし、
唱えた。「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う。」[4]
この呼び交わす声によって、神殿の入り口の敷居は揺れ動き、神殿は煙に満た
された。[5] わたしは言った。「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇
の者。汚れた唇の民の中に住む者。しかも、わたしの目は／王なる万軍の主を
仰ぎ見た。」[6] するとセラフィムのひとりが、わたしのところに飛んで来た。そ
の手には祭壇から火鋏で取った炭火があった。[7] 彼はわたしの口に火を触れさ
せて言った。「見よ、これがあなたの唇に触れたので／あなたの咎は取り去ら
れ、罪は赦された。」[8] そのとき、わたしは主の御声を聞いた。「誰を遣わすべ
きか。誰が我々に代わって行くだろうか。」わたしは言った。「わたしがここに
おります。わたしを遣わしてください。」

新約聖書 ローマの信徒への手紙８章 12 節―17 節（新共同訳）

[12] それで、兄弟たち、わたしたちには一つの義務がありますが、それは、肉
に従って生きなければならないという、肉に対する義務ではありません。[13] 肉
に従って生きるなら、あなたがたは死にます。しかし、霊によって体の仕業を
絶つならば、あなたがたは生きます。[14] 神の霊によって導かれる者は皆、神の
子なのです。[15] あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、
神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アッバ、父
よ」と呼ぶのです。[16] この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わ
たしたちの霊と一緒になって証ししてくださいます。[17] もし子供であれば、相
続人でもあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリス
トと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。

教会讃美歌 294 番「恵みふかみ声もて」1,2,3 節、236 番「いのちのことばは」1,2,3 節、181 番「ここにいます」1,2,3 節、192 番「主イエスよ思いと」1 節。